



## PROFIL

PHOTO・ADRIAN PEACOCK/TEXT・TERUMI TAKANO

場ロンドンのレコーディング・スタジオのスタッフも脱帽したと聞くが、考え方も一本筋が通っているオフラの意見には説得力がある。

「私たちの国は長年のアラブ諸国との確執を少しずつ解決して、今本当に平和な国づくりをめざしているところです。でも、なかなか情報が行きわたらないし、イスラエルに対するイメージが変わりにくいところがあるんですが、私の歌が大勢に知られることにより、実はイスラエルがとても美しい国で、民主的で、人々はオープン・マインドであるということを理解してもらええる気がするんです」

彼女の歌の多くに、メッセージがあり、平和を訴える意味のものが目立つ。それも、国家レヴェルで大きさではなく、ひとりひとりに暖かく、わかりやすく、語りかける。「エシヤール」に代表される様に、近所に住むアラブ人と、一緒に踊って、ケンカをやめて音楽を通じてコミュニケーションをとってしまおうよ、なんて具合に、である。

私が訪れたオフラの出身地、テルアビブは、あの、テロ事件などを外電が伝えるテルアビブとはまったく違っていた。地中海に臨むエキゾチックなリゾート地、市街の街並は、パリのシャンゼリゼとまではいかなくとも、東京の青山通りよりずっと美しく、洗練され、アート・ギャラリーが立ち並ぶ緑の多いストリートに、これはもうパリエンスに負けじ劣らじのファッショナブルな女性たちがイキイキと歩いている。都会そのものだ。「政府でさえうまくイスラエルをプロモート出来なかったことを、私は自分の曲によって可能にした」

と言ったオフラの言葉が、私は忘れられない。